

## 山並み景観から探る篠山盆地の景観特性の解明

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程

江村 優一

**1. 研究目的** 篠山盆地は、生活に密着した田園景観が残っている数少ない地域である。しかし、近年、田園景観とその背景を成す山並み景観が市街化の進行によって喪失していくことが危惧される。本研究では、篠山の情緒的景観特性と山並みが景観特性に与える要因を探ることによって、保全と継承が求められる篠山らしい景観特性を解明することを目的とした。

**2. 研究方法** 調査対象とした篠山盆地は、南北約 4km、東西約 12km の広がりをもっている。盆地内では篠山城址を中心に市街地が発展し、その周辺の平地部に田園地帯が広がり、盆地の平地部全体を標高約 250～600m の山地が取り囲んでいる。特に田園地帯に標高約 230m～450m の微地形が点在しているのが特徴である。調査では、篠山市が発行する田園農地眺望景観ガイドラインから、20 景を調査対象景として抽出するとともに視点場を特定し、同一視点・視対象の写真 20 枚を H. 27 年 8 月に撮影した。次いで、物的景観特性を写真内の景観構成要素と構成率、山の仰角、山裾までの距離、可視領域と断面構成から捉えた。また、H. 27 年 10 月～11 月に 20 景を刺激写真として、本学域の学生 70 名を被験者として、情緒的景観評価については 15 対の情緒的語句を用い、山並み景観については 10 項目の山の印象に関する語句を用いた意識調査を実施した。解析では 20 景に対する情緒的評価の平均評価点を算出して基礎データを作成した。さらにこれらをデータとして、因子分析を適用し、篠山らしさを表出する景観特性を把握した。次いで、山並み景観の印象評価についても同様に因子分析を適用することにより、山並み景観が景観特性に与える要因を探るとともに篠山らしい山並み景観の特性を把握した。

**3. 情緒的景観特性** 解析では、第 1 因子を「良好な田園景観」、第 2 因子を「山の象徴性」と意味づけし、クラスター分析によってタイプ I～V の 5 タイプに分類した(図 1)。その結果、「良好な田園景観」と判断されたタイプは以下の 3 タイプあった。タイプ I：良好な田園景観であり山の象徴性が強いタイプは、画面の約 98% を農地や樹林等の自然物が占めていた。タイプ II：やや良好な田園景観であり山の象徴性が弱いタイプは、いずれも画面の約 9 割を自然物が占めていた。タイプ IV：やや良好な田園景観であるタイプは、画面の約 7～9 割が自然物であった。このように、篠山では農地や樹林などの自然物が画面の概ね 8 割以上を占める良好な田園景観が多くなっていった。また、

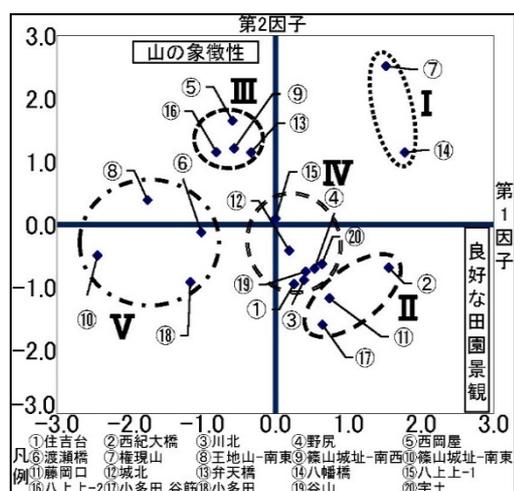


図 1 盆地景観の情緒的景観特性  
(因子得点を用いた布置図)

「山の象徴性」が強い景が⑤, ⑦, ⑧, ⑨, ⑬, ⑭, ⑮, ⑯の計8景存在することがわかった。

4. 山並み景観の景観特性 解析では、第1因子を山の「威圧性」、第2因子を山の「重畳性」と意味づけし、クラスター分析によってタイプⅠ～Ⅴの5タイプに分類した(図2)。**[威圧性]**:山の「威圧性」が弱い、もしくは中庸と判断されたタイプは以下の3タイプであった。タイプⅠ:山の重畳性が強いタイプは④, ⑦, ⑧, ⑬, ⑱, ⑲の6景であり、山の仰角はすべて山の威圧感を感じない5度以下であった。タイプⅡ:山の威圧性と重畳性がともに弱いタイプは⑥, ⑫, ⑭の3景で、山の仰角は5度以下であった。タイプⅤ:山の威圧性がやや弱いタイプは①, ②, ③, ⑩, ⑪, ⑮, ⑰, ⑳の8景であり、山の仰角は概ね5度以下であった。また、全てのタイプにおいて、山までの距離は概ね1.5km以上となっていた。一方、「威圧性」が強いと判断されたタイプは以下の2タイプであった。タイプⅢ:山の威圧性が非常に強いが重畳性は弱いタイプは⑯のみであり、山までの距離が400mと近く、山の仰角は約13度と非常に大きく、山の威圧感を強く感じる角度となっている。タイプⅣ:山の威圧性が強く頂上性がやや弱いタイプは⑤, ⑨の2景であり、山までの距離が1.5km以下と比較的近く、山の仰角は6~8度とやや威圧感を感じる。このように、篠山では山の仰角が5度以下の山の威圧感を感じない景が多くなっていることがわかった。**[重畳性]**:山の「重畳性」が強い、もしくは中庸と判断されたタイプは以下の2タイプ計14景である。タイプⅠでは景の構図は3種類存在したが、すべての景において山の折り重なりが見られ、微地形が中景域において画面両側から中央部に張り出した地形や、盆地を囲む山との折り重なりが見られた。タイプⅤでは4種類の構図が存在したが、すべての景において山の折り重なりが見られた。一方、「重畳性」が弱いタイプはタイプⅡ, Ⅲ, Ⅳの3タイプ計6景であり、山が前景によって大きく隠されている景や、折り重なりが少ない山のみが視認できる景が多く見られた。このように篠山では、山の折り重なりのある重畳性が強い景が多くなっていることがわかった。

5. まとめ 篠山らしさを代表する景観は、田園景観が引き空間として広がり、山への眺望を阻害する前景要素が存在せず、山の威圧感を感じない、重畳性が見られる山並みが存在する景であることがわかった。今後、篠山らしい山並み景観の保全には、山への眺望を阻害するような道路沿道や市街化調整区域の用途変更を抑制すること、さらに建物高さ制限等を継続することが不可欠であると考え。

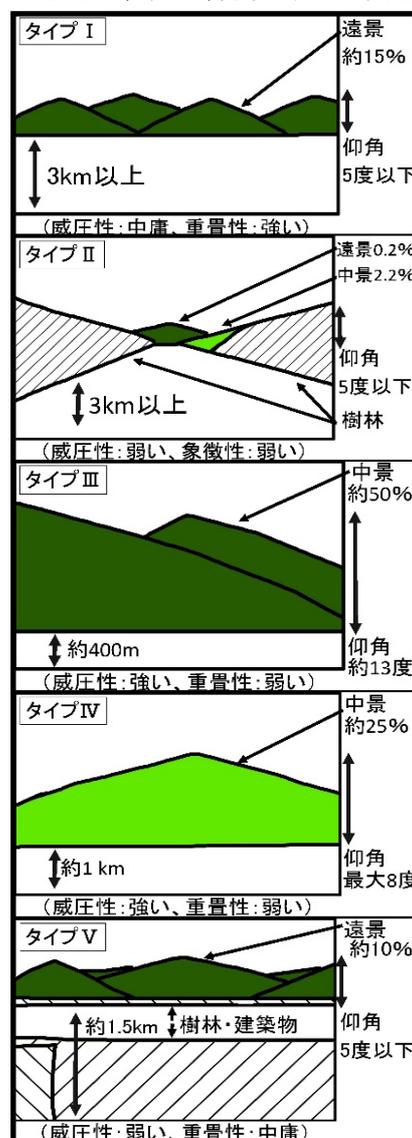


図2 山並み景観の景観モデル図  
タイプ別代表例